
バカと魔法少女と召喚獣

野中つかさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと魔法少女と召喚獣

【Nコード】

N1161Y

【作者名】

野中つかさ

【あらすじ】

明久はいつもの様に教室に入ると、ある違和感に気づいた。「あれ？ あんな子この学校にいたっけ？」何と、昨日話したばかりなのに、今日は文月学園主催の体験授業だったことを忘れていたのだった！ クラス分けてFクラスになる鹿目まどかと美樹さやかと、ようやく二人と打ち解けた暁美ほむらはAクラスに行った。そしてAクラスがFクラスに戦闘態勢に入っていることに明久たちは気づいた！「Fクラスって、皆、元気なんだね……」（by鹿目まどか）

バカとテストと召喚獣 の世界に 魔法少女まどか マギカ のキ
ヤラ達が乱入！ 一体どんなハチャメチャ展開が始まるのか！？

バカと中学生と体験授業

「それじゃ、見滝原中学の体験授業は決定さね」

「それは良いのですが……別に二年生全員ということにしくとも良いのでは？」

「それでも良いんだけどね、最近バカジャリ共のせいで、学園の評判は駄々下がりだ。高橋先生も知っているだろ？」

「ええ」

「一人でも多く、この学園に来るためには一気に興味を引かせる方が、効率上がるさね」

「なら受験生の三年生を狙えば良いじゃないですか」

「三年生だと、進学する学校を決めている奴は多いからね。ここに進学する奴も多く来るとは限らない。勿論、三年どもにも対象に体験授業は開くさ。けど、それだけだと安心できないからねえ。保障をかけた方が良いと思ったのさ。まだ進学する高校を決めていない二年に体験授業をさせて、この学校に興味を引かせる。この学校で受験する確立は三年と比べて格段に上がるはずさね。それと、興味がでりゃ、人気も勝手に上がるさね」

「なるほど。そういうわけですか。確かにそれは効率は良いですね」

「わかったかい？ それじゃ、明日に見滝原中学にこちら側から二年用と三年用のテストを送る。体験授業の期限は明後日の火曜から金曜までだ。明日のHRにでも学園の二年どもに教えてやりな」

「わかりました」

雲ひとつないどこまでも続く青空。夏が終わり、紅葉がハラハラと道端に落ちていく。秋だと実感させる季節がやってきた。

「秋だねえ……」

空を見ながら秋をしみじみと感じていると、見慣れた友人の後ろ姿が見えた。

「おはよう、秀吉」

「明久か。おはようじゃ。今日は早いのう」

毎度お馴染み、見た目はどこからどう見ても、女の子そのものだけど、戸籍上は何故か男で、爺言葉で話す、少し風変わりな友達の木下秀吉だ。Fクラスの中では多分、一番の常識人だと思う。

「今日はちよつと早く目が覚めてね。やることないから早く出てきたんだ」

「そうか。お主の姉上はどうしたのじゃ？」

「最近の仕事が立て込んでるみたいで、朝早くから出て行ったよ」

「お主の姉上も大変じゃの」

「うん。それに今週は遅くなるらしいし」

それに最近仕事が多いせいかな、あまり会話が出来てないのも少し寂しいことは秘密。

そうだ！ 来週には姉さんの好きな料理でも作ってあげようかな。別に今月は月末までテストはないんだし。

「よ、明久に秀吉」

「……………おはよう」

後ろから声をかけてきたのは、背が高く、少し細身に見えるけど、ボクサーみたいな体つきをして、小さい頃、神童と呼ばれていたらしい僕の悪友の坂本雄二と、いつも盗撮、盗聴を趣味にして女子の写真を撮ったりするムツツリスケベな土屋康太。皆からは、^{ムツ}寡黙なる性識者と呼ばれている。裏ではムツツリ商会で、撮った写真を売っている。勿論僕も常連である。

「おはようじゃ、雄二にムツツリーニよ」

「おはよう、雄二。ムツツリーニ」

「珍しいじゃないか。明久がこんな時間に学校に来るとは」

「うん、朝早くおきて暇だったからね」

いつもの友人たちと和気藹々と雑談しながら学校に入った。

HRの予鈴が鳴り始まるなり、鉄人……もとい、西村教諭の姿が現れたと思つた矢先に、出席をとり始めた。出席を取り終えて、すぐに今日の報告をし始めた。

「明日から今週の金曜まで、見滝原中学校の二年生と三年生が、体験授業を受けることになった。わかつてると思うが、勿論この教室も使う。お前等は一様先輩だ。妙な行動は慎み、授業態度はきちんとするように」

そう告げて、鉄人は教室から出て行つた。

うーん……これじゃ、授業中に寝ることが出来ないじゃないか。それにしても……

「ねえ、雄二。普通体験授業つて、中学生は中学生で別でやるんじゃないの？」

「ほお、バカな明久でもそこまでわかるとは、流石にそこまでバカじゃなかったか」

「バカつて言うな！」

中学の頃、体験授業なんかには出たことないからわからないけど、中学生と高校生は習うところが一切違うはずだ。だとしたら、一緒に授業を受けるのはおかしいと思つただけだ。

「授業範囲は大体中学で習つたとこの復習か、中学生向けの授業をやると思うが、確かに合同でやるのはおかしいよな。普通なら別でやる方が断然やりやすいはずだ」

「じゃあ、何で一緒に受けなきゃならないのかな？」

「中学生に高校生の態度を見習えつてことじゃないか？」

「だったら、別にFクラスで授業をやるんじゃないかと、設備の良いAクラスとかで授業を受けたらいいんじゃないの？ 部屋も広いし」

「全員がAクラスとかに行ったら、あんな大きな部屋でも入りきらんだろ。それにここの学校はテストの点数でクラス分けをしてるだ

る。自分の良し悪しを理解するためにな」

「あ、そっか」

「多分、その中学生共もテストを受けてるんじゃないか？ その点数でAからFクラスまで分けて、ようやく自分の頭の良し悪しを把握する。頭の悪い奴に、この学校のシステムが気に入ってるのなら大抵は勉強するだろう」

「そんなことせずとも、テストの点数で決めればいいんじゃないの？」

「そんなの、テストの結果を見ればわかる話だし。」

「本当にバカだな、お前……。この学校は学力の向上でこういう風になっているんだろうが。普通のテストだったら、やっても何もやる気にならないだろ。だからこの学校には試召戦争という勝負がある。テストの点数で、勝負が大抵は決まる。勝ったら、上位クラスだったら、そのままになる。下位クラスだったら、上位クラスと設備交換。負けたら、上位クラスは、下位クラスと設備交換。下位クラスは、ランクを一つ下げることになる」

「あーなるほど。勉強をして、絶対に上に行ってやるっていう闘争心を沸かせるんだっただね」

「まあ、そういうこつた。ま、それ以外の詳しい話は、明日になりやわかる」

「そっだね」

細かいことは明日、学園長らへんが教えてくれるだろう。いや、教えてもらう。」

「お前等、席に着け」

区切りの良いところに丁度チャイムが鳴り、鉄人が入ってきた。

「今日は英語の先生は忙しいので、俺が授業をする」

また熱い授業になりそっだ。

バカと中学生と体験授業（後書き）

どうでしたでしょうか。素人ながらも書いてみましたが、評価が低いのは致し方ないと思っております。

まどか達は次の話で登場する予定です。

次回もお楽しみに！

バカとFFF団と鹿目まどか（前書き）

この作品は二次作品です。原作者以外のBOOKはNOという方、アニメ、原作を汚すんじゃないやねえよ！！て方、原作通りに進めるやゴルーア！！って方は直ちに回れ右をして戻るボタンを押して頂いたらあなたの家に妖精さん（38歳独身）をお詫びに遅らせていただきます（嘘）。それでも読みたい方はFFF団加入届けを出してください。

バカとFFF団と鹿目まどか

『異端者には討伐せよ！！！』

『『『おおー！！！！』』』

放課後。僕は今、異端審問会（討伐って言ってる時点で審問でも何でも無い拷問集団）の連中から全速力で逃げている。

どうしてこうなっているかというところ、話が長くなるんだけど、簡単に言えば、

「止まれ！お前が中学生の女の子と一緒にデートをしていたことは調査済みだ！」

単に迷子だった女の子と歩いただけでこの始末。恐ろしすぎる想像力だ。むしろ尊敬できるかもしれない。

「だから誤解なんだってば！僕は迷子の女の子と一緒に友達を探してただけじゃないか！」

走りながら一生懸命弁明するが、

『言い訳は聞き飽きたわ！！』

まず、話を聞いてくれないから厄介だ。

でも、このままだといつ捕まってしまうか時間の問題だ。こうなったら、どうしても使いたくなかった最終手段を使うしかないか…

…！

……ええい！背に腹は変えられない！

「これでもくらえ！」

そして僕が投げたのは、ムツツリー二からなけなしの金ではたいて買った、美波と秀吉と姫路さんの写真をばら撒いた。

『何をす　ぬおおお！？』

FFF団の連中は、死ぬ物狂いで写真に手を伸ばしていた。よし！どうやら食いついたようだ！

「いまだ！」

僕は全速力でその場から逃走した。……何だかFFF団の皆の姿が凄く哀れに見えた。

さて、商店街まで逃げてきたんだ。流石にあの連中も諦めてるだろ……………と信じた。でもここまで来なくとも、明日、また襲ってくるだろうし、対策練っておかないと、怒りの矛先の雨が明日中ずっと降りかかるだろうし……………。

と、対FFF団用始末案を一人で練っていると、背中に誰かがぶつかったのがわかった。

「あ、すみません！」

と謝罪の声が聞こえて、僕は後ろを振り向いた。

「あ、昨日の迷子の子か」

ピンク色に染まって、ツインテールをしている。体系は小柄で、大体150センチ半ばって感じた。養子もかなり良い。その子は少し震えながら、僕の顔を覗くかのような上目遣いで見た。少し可愛。

「って、ダメだ、吉井明久。僕は何を考えているんだ！」

「？」

相手は小さな女の子だぞ！ 何ときめいてんだよ、僕！ 僕は口リコンじゃない！ そう、断じてない！ ……そうか！ そう考えたらこの感情につじつまが合う！

僕は少し顔を傾けている彼女に面向かって言い放った。

「僕を殴ってください！」

「え、えーと……………ええええええ！？」

そうだ！ これは夢なんだ。そうじゃなけりゃ、この子の可愛いと思うこともなかるう。早く目を覚まさない、色々バイことに

なりそうだ。

僕が放った言葉に戸惑いを隠せない様子の彼女。

「ええと、どうしたらいいの……かな？」

何だか困っている様子の彼女。

あれ？ 何で僕の夢なのに彼女は言うとおりに動かないんだろう。

あ、そうか。そういう考えの方が話が合う気がする。そうかそうか……。

「ああそうか。僕、死んじゃったんだね……」

「どうしてそうなるの!？」

多分、走ってる途中にFFF団の連中に殺られたんだろう。記憶にはないけど。そう。これは夢さ。僕の人生の、天国からの送りも

「えいつ!」

「ぬはあ!？」

と少し悲しみの思いに包まれていたら、殴られた。頬に。グーで。なに!？ どゆこと!？」

僕が今起こったことの現状把握が出来なくて混乱していると、彼女は親切に答えてくれた。

「あなたが死の淵に彷徨いそうだったので、悪いと思いつつも、攻撃しました」

あー、そういうことか。

「良かった。まだ僕生きてるんだ」

「凄い思考回路ですね……」

僕は改めて生きているという実感を感じていると、先ほどのことを思い出した。

「そっぴや、君、昨日の迷子の子だよね?」

「あ、はい。そうです。あ、そっぴえば自己紹介してませんでしたね。私、見滝原中学2年の鹿目まどかって言います」

そういつて、鹿目さんはベコリとキツチリ90度まで頭を下げ、お辞儀をした。

「僕は文月学園2年の吉井明久。ごめんね、鹿目さん。さっき取り乱しちゃって」

「大丈夫ですよ。ちよつと楽しかったですし」

「それでいいの……かな？ あ、そうだ。鹿目さん、あの後ちゃんと友達と出会えた？」

「はい。ちゃんと待っていてくれました」

「そうか。よかったね、鹿目さん」

「はい！ ありがとうございます！」

いい子なんだなあ。ちゃんとお礼も言うし、いい子に育ってる。うちの姉とは大違いだ。

と関心していると、ふと疑問が遮った。

「そういえば、何であんなに急いでたの？」

普通人の背中にぶつかる事なんて、走ってるときぐらいないだろうし、何かに追われてたのかな？

「あの……実は、変な覆面を被った人達に話しかけられて……」

何だろう。凄く嫌な予感がする。

「私、怖くて、それで逃げたら、追われてしまっ……」

何だか、凄い罪悪感を感じてしまっ。多分それって……

「見つけたぞ！ あの中学生だ！」

「でかした！」

「おい！ 隣に吉井もいるぞ！」

「何だと！？ あの野郎、またあの女の子に手を出そうとしてるのか！ どうしますか、須川会長！」

「吉井明久と桃色ガール二名を直ちに捕獲し、吉井明久を処刑する！」

「逃げよう鹿目さん。とにかく全力で。全速力で」

「は、はい！」

鹿目さんがなみだ目寸前ながらも僕と同時に走り出した。

『さて！ お前はどこまで女を増やせば気がすむんだ！』

『妬ましい！ ああ、妬ましい、妬ましい！！ 女に縁のある吉井が妬ましい……！！！』

『クロス……ヨシ……クロス……』

『 x 5 # & a m p ; f ! 0 \$ L]、 ; ; ! ! ! 』

何か、異常なまでに嫉妬狂ってる！ 怖い！ 怖すぎる！ 捕まったら確実に殺されてしまう！

僕等はとりあえず、走りに走りまくって、丁度連中から死角になるような場所に隠れた。

「ん、明久。どうした、そんなに慌てて」

と思った矢先に雄二に見つかる。

「今、FFF団に追われているんだ」

「何だ、またやらかしたのか明久……ん、誰だそいつは？」

鹿目さんと目が合った雄二は気になって質問してきた。

「話は後！ また今度で！」

「さて明久」

雄二にガチリと方を捕まれ、まるで蔑む目で僕を見てきた。

「お前、とうとう少女までに手を出したのか？」

「大きな誤解だよ……！！」

全力で否定する。

『おい！ こっちから声が聞こえたぞ！』

『奴等だ！ 追え！』

しまった！ 大きな声出してしまって気づかれてしまった！

「ええい、こうなったら！」

僕は鹿目さんの手をガッチリと握って、大きな声でFFF団に向けて言い放った。

「雄二つて、本当に霧島さんとベタベタするの好きだね！」

「……はあ！？」「」

勿論、そんなことは雄二はできやしない。これも逃げれるための作戦だ。それと、思ったより効果は絶大で、FFF団の連中全員が立ち止まり驚いて、雄二も啞然として僕を見ていた。その隙に僕は全速力でその場から去った。

『あ、明久！お前、根も葉もない嘘を言う よ、よせお前等

！俺は何もやましいことはしていない 』

雄二……雄二の犠牲は、絶対無駄にはしない！！

……………。

とりあえず、明日学校で雄二に謝っておこう。

とりあえず、鹿目さんがわかる道まで送って、僕は一人ぶらぶらと帰り道を歩いていた。

「今日は大変だったな……………」

本当に大変な一日だった。

何故か授業の担当の先生が全員変わってたし、FFF団に追われるし、おまけに雄二まで敵に回しちゃったし……………。

「むしろ明日が大変だなあ……」

と、少し憂鬱な気分になりつつも、前向きに考えた。

そうだよ、明日にはあの連中は僕のことには忘れているさ！ 雄二に矛先が向いたから、多分大丈夫だろう。後は雄二に謝ればいいだけだよ。うん。正直、あんな奴に謝罪の一言も言いたくはないけど、今回は完全に悪いことをした。謝らないと雄二に悪い。僕の秘蔵コレクションでも上げれば許してもらえるかろう祈っておこう。別に雄二の反撃が怖いわけじゃないよ？ 本当だよ？

さて、もう夜遅いし、さっさと帰って寝るかな。

「明日も頑張ろう！」

自分に気合を入れて、家まで全力で走った。

バカとFFF団と鹿目まどか（後書き）

どうも野中つかさです。

今回はまどかも出演できました。

結構危ない感じになってきてますが、多分大丈夫でしょう。

次回は体験授業回です。

それでは、お楽しみに！

Fクラスと明久と試召戦争（前書き）

吉井「え？ 僕が読者に諸注意をしる？ ちよ、何で、ちよ、雄二！ 行かないで！ ……仕方ないか。えーと、この原稿を読めばいいのかな？ えー『今回も容赦ない二次作品です。原作者じゃないとやっつけられるか、原作を汚すな！』って方、原作通り進めましょうね、って方、二次作品やるぐらいなら、吉井明久に諸注意読ませるや！って方は』って、これかあ！ この最後の文のせいで読ませられてるのか！？ って、何雄二 ぶごあ！ べ、べつになくならなくてもあ……わかったよ……読めばいいんですよ。 えーと……『回れ右をしてすぐちにお帰り』……ん？ どうしたの、雄二？ うん……うんうん……あ、この漢字（直ちに）って、”すぐちに”じやなくて”ただちに”って読むの！？ 何か恥ずかしい！ えーと、『直ちにお帰りください。それでも読む方は、吉井明久に諸注意を読ませて笑いましょう』……おい！ そこ笑うな！！ くそおおおおお！！ このやろおおおおお！！」

Fクラスと明久と試召戦争

「今日も良い朝だな……」

雲ひとつない大きく澄み渡る青い空。全てを包み込んで、癒してくれそうな空。

「誰も天気の話はしてないぞ。吉井」

僕の前に浅黒い肌に趣味のトリアスロンで鍛え上げた筋肉が服の上から見てもわかる。そう。鉄人……もとい西村教諭である。

どうして僕が鉄人と対峙しているかというのと、いつもより早い時間に学校に来て、教室に入ったら、Fクラスの皆が見たことのない子達と話をしていて、雄二に事情を聞こうと声をかけたら、皆（F F F団全員と雄二）がこちらに振り向いて、殺気を感じた僕は一目散に逃げたら悪魔……いや、鬼と称してもおかしくない形相で追いかけてきた。そうしてたらいつの間にかチャイムが鳴って、鉄人に見つかり、僕以外、皆逃げ出して、校舎外まで逃げた僕は一人捕まり、そこで説教を受けているのだ。

「ったく……お前にはいつもいつも悩まされる。もう《観察処分者》という称号だけでは足りない気がするほどまでな」

「違うんですよ！ これは、Fクラスの連中が僕を殺しに掛かって来たから逃げてただけで」

「言い訳はいい。聞き飽きた。ったく……今日は中学校の体験授業だというのに、昨日あれだけ妙な行動派慎めと釘を打ったはずだが……一度、洗脳が必要かもしれんな……」

「先生。問題児に説教するのは文句ありませんが、洗脳するのだけはやめてください」

心からの文句であった。

こんな人間離れた妖怪男に洗脳なんてされた暁には、自分は死ぬ覚悟がある。

「冗談だ。そんなことができたら、最初からしている」

それもそうか。……え？ てことは、出来たらしてたの？

「さあ、さつさと戻れ。流石に1時間ずっと説教するほど、俺は暇じゃない」

「はい」

僕は鉄人のプチ説教から終えてそそくさ教室に戻った。

それで教室の前まで来て、どうやって入るか悩む。

今日から金曜まで4日間体験授業に来た中学生らと過さなければならぬ。だけど、さっきの騒動でもしかしたら悪い印象を与えてしまったかもしれない。やっぱり人間なんだから良い印象を持ってほしいと考えるもの。ならば、どうやって好印象になるような行動すれば良いか。

「ただいま！」

いや、そんなことをしたら、僕がこの教室に住んでるみたいじゃないか。ならば、これならどうだろう。

「おはよう諸君！」

僕は独裁者か何かか！ 違う違う！ 何でこんな風になっちゃっんだ、僕は！

……普通に「遅れました！」って言えばいいじゃないか！ 何で僕はこんな簡単な事を思いつかなかっただんだ！ よし！ そうと決まれば！

僕はドアを開けて、

「すみませーん！ 遅れました！」

「さつさと座れクソバカ野郎が」

「台無しだっ!!」

既視感を感じたが、まあ、今は関係ない。というよりも誰だ！
入ってきて早々毒舌吐いたのは！ って

「雄二じゃないか」

教卓の前にいたのは、いつも見慣れた悪友の姿だった。

「どうしてそんなとこにいるの？」

と言つて、黒板に目に入った。そこには自習と書かれていた。

「理科の布施……先生が、さっき呼び出して出て行ってこの時間は自習になった」

今、雄二らしくなく先生と呼んだけれど……あー、中学生がいるからか。

「そしてその自習の間に、今回短い期間の間、世話になる中学生の自己紹介を聞こうと思ってな」

「へー、雄二らしくないな。いつもならめんどくさがって、そんなこともしないくせに」

「今日は状況が違うからな。その話は自己紹介が終わったら話す」
状況が違う？ どういう意味だろう。

でも考えてもわからないと思ったので、さっさといつもの席に座った。

それを見ていた雄二は、周りを見渡し、皆を見て自己紹介を始めた。

「俺はFクラス代表、坂本雄二だ」

と簡潔に終わらせ、その場に座った。

「次はそのピンクのから自己紹介を始める。特技とかも付けてくれてもかまわんぞ」

「は、はい!」

あ、あの子、昨日の子じゃないか。何か、運命的な出会いというものを感じるな。ていうか、鹿目さんって、勉強苦手なんだね。と、少し鹿目さんの登場と、昨日のギャップに驚きながらも、鹿目さんの方をみた。

紹介が終わり、雄二は立ち上がった。状況が云々という話をするの
だろう。

雄二は少し強張った表情で口を開いた。

「体験授業で来た生徒は一樣この学校のシステムについては知って
いるな？」

中学生の方を見て、わかったように頷いた。

「じゃあ、一樣説明しとく。この学校はテストの点数で上下関係を
決める。お前等もみたる？ Aクラスの設備。Fクラスとは段違い
だ。でも普通じゃ、この設備を変えることはできない。だが、この
学校は試召戦争で教室の設備で変えることが出来る。試召戦争って
いうのは、試験召喚獣という、自分の分身みたいな奴で敵と戦い、
相手の頭を倒せば、こちら側の勝利。敵の教室の設備を交換できる。
ただし、それもルールがある。設備は上位クラスが勝利なら、その
まま変わらない。ただし、負けたなら、設備は勝ったクラスと交換。
下位クラスが勝利なら、上位クラスと交換。負けたのならランクは
一つ下がる仕組みだ。勿論、試召戦争に勝つのはお前等次第だ。勉
強すりゃ、こんなオンボロ教室から脱出できる」

雄二がこの試召戦争について説明をする。眠ってる人がいるかな
ーと思つて、後ろを見てみたが、誰も寝ている人はいない。皆雄二
の話に集中しているようだ。

「試召戦争を始めるには宣戦布告をする。宣戦布告したクラスとさ
れたクラスは日時を決めて試召戦争を行う。その間は、他のクラス
の宣戦布告を受けることは出来ない。戦争が嫌なら、宣戦布告から
逃れるしかない。そしてここからが本題だ」

教室全体から、緊張している気がぐんぐん伝わってくる。

「Aクラスが、どうやらFクラスに戦争を始める気らしい」

教室がざわつく。ちょ、どうしてAクラスがFクラスに戦争を始
めようとするの？

「雄二。どういうことなの？」

「さあな。それがわかったら苦労しないんだがな。ムツツリー二が

今調査しているようだが」

「……………今の所、原因不明」

ムツツリーニがそういい、余計にざわつく。

「だからだ。何があったか知らんが、試召戦争を今受けたら負けてしまうのがオチだろう。そこで試召戦争だ」

「え？ どういうこと？」

「時間稼ぎだ。試召戦争が終わったなら、次の日はテストになる。その間にAクラスに勝てるための戦法を考えておく。勿論、お前等にも勉強はしてもらおう」

「じゃあ、どこに宣戦布告しに行くの？」

「Dクラスでいい。行ってこい。明久」

って、あれ？ 僕が行かないといけないのは決定事項の？

「ちよ、雄二！ 何で僕が行かないといけないのさ！」

「何だ？ 行かないのか？」

「前にあれだけの目にあつたんだから、行くななんていうわけないだろうが！」

「そうか。なら仕方ないな。おい、鹿目に美樹とやら。吉井について行ってくれないか？」

雄二の発言で一瞬で周りが殺気立つ悪の空間と化した。

「明久君。もし一緒に言ったらどうなるか、わかってますよねえ？」

成績はAクラス代表にも匹敵のするんじゃないかと言われるぐらいの点数を誇る姫路瑞希さん。容姿は普通の人よりも一つ上で、可愛いという言葉でピッタリはまる。性格も良いし、お嫁さんには持つてこいだ。

と、いうものの、今の姫路さんはどこかの悪魔よりも恐ろしい。

「アキ。わかってるわよね？ ウチを敵に回したらどうなるかって

そしてドイツからの帰国子女の島田美波で、ポニーテールをしていて、姫路さんとは違う魅力がある。そんなところにたまにひかれたりするけど、とても今はそう見えない。というか、今にも間接を曲げられそうな感じのオーラをまとっている。

でも、どうしてこんなに皆怒っているのか。理由はわかっている。おそらく、昨日の件だろう。

「あのー、私たち、行かない方がいいのかな……?」
美樹さんが僕に気を使うように言う。

「いや、一緒に行ったほうが良い。明久もそうしてもらいたいそうだし」

「雄二! デタラメなことを言わないで!」

雄二は僕を殺されるのも見たいのだろうか。見たいだろうな。こいつなら。

「いや、でも……そんな風に見えないし」

と、雄二は何やら溜めていたものを吐き出すように言った。

「そっぴや、明久が『今日も二人でイチャつけるぞ』とか何やら

「グッバイ!」

『まてやゴルアアアアアア!』

僕は全速力で教室を飛び出した。

「行っちゃった……」

「Fクラスの皆って、元気だね……」

「よし、鹿目とやら。今から宣戦布告に行くぞ」

「え、でも授業中じゃ……」

「大丈夫だ。別にいつ宣戦布告しようが問題ない」

「でも、どうして私だけ?」

「お前には話がある。明久と何があったかな」

「え、まどか……もしかして、吉井先輩と言えない様な仲なのお?」

「ち、違うよ!」

「だとしても、詳しく聞かせてくれ。明久の人生に関わる話だからな」

「確かに、そうなりそうね……」

「おし、じゃあ鹿目の保護者の許可も下りたところで、宣戦布告行
くぞ」

「え、あ、待って！」

「……うーん、何か坂本先輩とまどかを見てると、親と小学校の娘
に見えるわ……」

Fクラスと明久と試召戦争（後書き）

さあ、今回はどうでしたでしょうか？

何だか自分では面倒くさくなってるような気もしますが、気のせい
ですよ。そう、気のせいです。

では、次回もお楽しみに！

バカテスト「英語」

次の英文を日本語に訳しなさい。

・ Do you think this movie is interesting?

姫路瑞希の答え

「あなたはこの映画を面白いと思いますか？」

教師のコメント

正解です。流石Aクラスの学力を誇る実力は衰えませぬね。

鹿目まどかの答え

「あなたはその映画を難しいと思いますか？」

教師のコメント

「その」の単語は”that”であり、”this”ではないですよ。

それと”interesting”は「興味を起す」、面白い「という意味です。

単語の”difficult”の「難しい」と間違えたのですか？もしそうならこの機に覚えておきましょう。

吉井明久の答え

「あなたはこれ」

教師のコメント

どれですか。

土屋康太の答え

「これは映画」

教師のコメント

そうですね。私は映画だったのでですか。

バカテスト「英語」(後書き)

皆さん、おはようございます。こんにちは。こんばんは。

僕はどちらかという学力は低い方なので、もしかしたら間違っているかもしれませんが。

間違っていたら報告くださいませ。

魔女と魔法少女と美樹さやか（前書き）

おっす！ おら、前書き！ こんかいも諸注意書くぜ！

お前ら！ この作品には二次つていうもんがある！ つまり！ 作者じゃない奴が書いたんだ！ それが嫌なら帰った方がいいぜ！
それも見たい奴は見ていったらいいと思っぜ！

魔女と魔法少女と美樹さやか

「ふう……助かった……」

危うくFFF団に捕まって処刑されるとこだった……。

とりあえず、無我夢中で校外まで逃げ出したから、後で先生の説教待ちかあ……嫌だな……説教……。

と、未来のことを考えて滅入っていると、何か凄い違和感を感じた。

「なんだろう」

顔を上げると、さっきまでであった町の風景ではなく、天変地異の謎の空間に僕は立っていた。

何だ、この物凄く気持ちの悪い空間は……。

今まで味わったことのないこの感覚に怯え、ここから逃げ出そうと走る。

とりあえず、ネガティブになったら、死ぬってよく言うから、今までであった良い思い出を思い出そう。

そういえば、小学校の入学式は嬉しかったなあ……あの時はランドセルが背負えるっただけでも嬉しかったし、本当に今でもこの感情を覚えて……

「って、これじゃあ走馬灯みたいじゃないか!!」

こんなことを考えててもダメだ！とにかく、この空間から逃げることを考えよう。

「っ！ 殺気!!」

僕は左の方向に思いっきり蹴り、その場から離れた。

さっき僕が立っていた場所はかなり鋭利で50センチ?はある包丁が刺さっていた。

「奴らか！」

と思つて振つてきたと思われる方向を見たが違っていた。そこには小さなアフロをしていて、エプロンを着ている、大阪とかにいそ

うなおばちゃんが立っていた。身長は尋常じゃないぐらい高い。5メートルmはいつてるんじゃないだろうか。

「てか、ヤバイ！」

とにかく殺されそうな勢いだったので、咄嗟にその場から逃げ出した。

と、後ろから、ドスン！ ドスン！ と恐ろしい足音が聞こえてきた。

「殺されるうううううううううううううううううううううううう！！」

ダメだ！ 死んじやう！ このまま逃げてても殺されるのがオチだ！ こうなったら、何か落ちてるものでも投げて時間を稼ごう！

「！これだっ！」

僕は道端に落ちていた、聖典エロ本を投げた。

『！？』

よっしゃ！ どうやら効果抜群のようだ！

ビリリリイ！！

ダメだアアアアア！ すぐに破られたア！ ていうか、何ていう人だ！ 人類の宝石とも謳われる聖典エロ本を破り捨てるなんて！

って、そんなこと考えてる暇じゃなかった！ 早く逃げないと！ と走り出したら、落ちていたバナナを踏んでしまい、こけてしまった。

「クウウ！ 僕の人生はここで終わるのか……！！」

父さん、母さん、それと姉さん。僕を大事に育ててくれてありがとう。僕はもう、心置きなく、

「死んでたまるかああああああ！！！！」

僕はまだまだやり残したことがいっぱいあるだ！

と、僕が大きく叫んだせいか、巨人のおばちゃんは驚いた様子だ

った。その矢先に

「うりゃあああああ！！！」

誰かの掛け声と友に、巨人のおばちゃんは悲鳴を上げて、その場で消滅した。

それと同時に天変地異の空間は消え去り、いつもの町に戻っていた。

「え、ええと……」

今の状況に少し戸惑っていると、ここにはいないはずの子がいた。

「み、美樹さん？」

そう。そこには学校のFクラスにいる筈の美樹さやかさんが居た。

「大丈夫ですか？ 吉井先輩」

手を差し伸べてくれたので、その手を借りて僕は立ち上がった。

「うん。だいじょう僕は何も見ていない何もしていない」

「せ、先輩？」

美樹さんの格好がいつもの制服ではなく、胸を隠すぐらいしかない青い鎧……胸当てって言うんだっけ？ それと、胸当てに白いフリフリシャツを着ていて、少しおへそが見える。その上に宝石みたいなのがはまっている。最近流行っているお洒落なのだろうか？ 青いスカートをしていて、青色が似合いそうな彼女の特徴を良く出している。

この格好でも結構露出してるから、少し照れくさい。というか、こんなところをFFF団の誰かに見つかったら、僕よけいに変態疑惑かけられないかな！？

「美樹さん！ 早くそれ脱いで！」

「え、ちょ、何言ってるんですか、吉井先輩！？」

あれ？ 僕変なこと言った？

「だから、その格好で一緒にいられると……」

「あー、そういうことか。わかりました」

と、彼女が言っていると、美樹さんの体が光り出し、彼女らの通う中学の制服の姿に戻っていた。

「え？ どういうこと？」

そう。目の前で変な服から美樹さんの通う学校の制服に戻ったのだ。初見でみたら摩訶不思議この上ないだろう。

「あー……えーと、驚きませんか？」

「え、あ、うん」

何だろうか？

「私、魔法少女なんです」

多分、今年最大の驚きだろう。

魔女と魔法少女と美樹さやか（後書き）

こんかいは少し中途半端な終わり方になってしまった気がしますん。
それでは、次回もお楽しみに！

バカテスト「国語」

次の四字熟語ついて答えなさい。

「四面楚歌」

? 意味を答えなさい。

? この四字熟語を使い、文章を作りなさい。

姫路瑞希の答え

? 周囲を敵や反对者で孤立し、助けや味方がいないこと

? 私は学校で成績優秀であったが、周りが四面楚歌だったことに気づいた。

教師のコメント

正解です。故事による四面楚歌とは、項羽が垓下^{がいか}という場所に漢軍に追い込まれ、項羽は夜更けに四面に囲む漢軍が楚の歌をうたうのを聞いて、楚の兵達は降伏したと思い、絶望したというもの。そこから敵や反对者に囲まれ孤立した状態のことを「四面楚歌」というようになったそうです。

島田美波

? 四面から歌が聞こえること

? 会場の中は合唱で四面楚歌だった。

教師のコメント

合唱団の歌声が聞こえたりという意味ではありません。

吉井明久の答え

? 全身の間接をキめられること

? 僕が秘密にしていたことがバレてしまい、四面楚歌になった。

教師のコメント

意味が間違っているのに、文章があっていることに本当に腹立だしく思うのですが、何故か本当にそんな気がして恐怖を感じます。

バカテスト「国語」(後書き)

皆さん、Good morning、Hello、Good evening .

今回は国語です。姫路さんの文章の答え間違っていないか心配です。

成績悪いですからね) . . .)

間違っていたら、ご報告お願いします。

魔女と走者と地獄の鉄拳（前書き）

木下優子「何よ秀吉。そんなに慌てて。え？ 早くこの台本を読め？ どういうことよ。あーうるさいわね。わかったわよ。言えばいいんでしょ？」この作品は二次ちゃくひん」……オホン。えーと、
「この作品は二次作品です。原作での設定はある程度ありますが、
気に入らない人もすくにやからず」……そこ！ 笑わないで！ 何
よ噛んだくらいで……『少なからずいると思います。そういう方は
お戻りになってください。それでもよい方は本編をどうぞ。（by
秀吉）』……秀吉。お姉ちゃんとお話しましょうか。そんな蒼白な
顔で抵抗しても無駄よ。さあ、二人でお話しましょうね……！！」

魔女と走者と地獄の鉄拳

美樹さんから聞いたかぎりでわかったことは、キウウベえと言う謎の生物が願い事を叶えてもらえる代わりに、魔女を倒すという取引で、魔法少女になるらしい。

話を聴く限りでは、少しうまい話がすぎる気がするけど、まあいいか。そこは僕が気にするところじゃない。

第一の問題は、美樹さんの事だ。

「美樹さんは、どうして魔法少女になったの？」

願いの代わりに、魔女を討伐するという恐ろしいこと、普通じゃ出来ると思えない。僕もさっきの騒ぎで魔女の恐ろしさを理解を得ていた。だから気になるのだ。美樹さんがどうして魔法少女になったのかを。

「あ、ええとですね……」

どうやら言いにくい事情でもあるようだ。こんな様子で聞き出すのは失礼だろう。

「あ、大丈夫だよ。無理に話さなくても」

「あ、そうじゃないんです！　ただ、少し話すのが恥ずかしくて…

…」

なるほど、願い事は他人に言いふらすものでもないし、それが、他人に聞かれたくない願いなら尚更だろう。

「別に無理強いるわけじゃないよ。言える時が来たら言って」

「あ、ありがとうございます」

少し頬を染めた笑顔で言ってくれた。うん、可愛い。

「あ、そういえば、さっきの魔女からグリー……グリー……」

「グリーンフシードですか？」

「そうそれ。それって落としてたの？」

一様説明は聞いたけど、どんな形かは知らない。

「はい。これです」

と、美樹さんはポケットから、黒い奇々怪々な物体を取り出した。
「これが……」

すこし戸惑ってしまう。僕が予想してたのは、黒くて鶏の卵ぐらいの大きさの物かと思っていた。それとは違い、少し複雑なつくりになっていて、感心させてしまうところもある。

「これと同じようなものが魔女が持つてるんだよね」

「そうです。これがないと、私たちにとっては死活問題ですけどね」
魔法少女にとっては、食事を取るのと同じぐらい大事な物らしい。これがないと、ソウルジェムが濁って、魔法の威力が下がってしま
うらしい。

「大変だね」

「はい。でも私にとっては、目指したいものがありますから」

多分、美樹さんの先輩のバマミさんのことだろう。

「それじゃ、そろそろ学校に戻るうか」

「そうですね。じゃあ戻りますか！ 吉井先輩！」

彼女は生き生きとした表情で学校の方へ走り出した。

「僕も行くか」

僕も美樹さんについていくように走っていった。

「酷い目にあつた……」

僕と美樹さんは、校門のところまで鉄人に見つかり、生徒指導室に連れていかれ、説教を延々と感じるくらいまでされた。もう拷問の域だった。

僕はともかく、美樹さんは鉄人の説教はさぞかし辛かったろう。

いや、僕も結構辛かったけどさ。

「死ぬかと思いましたよ……」

「そうだよ……あんな延々と続くような説教の後に英文で謝罪つて……もうあれ、処刑にされてるのと同じだよ……」

「そうですね……はは……はあ……」

「どうやら相当やられているらしい。まあ、仕方ないか。初めてだもんね。鉄人の説教地獄。」

「早く戻って休もうか」

「少しでも安眠ぐらいして身体を休めないと、持ちそうになかつ

『どうだ！ 吉井は見つかったか！？』

『いや！ 見当たらない！』

『クソ野郎！ 一体どこに逃げたがった！』

「このままでは永眠することになってしまふ。」

「美樹さん。こっちの廊下は忙しいみたいだから、他の階から行くか」

「え、別にいいですけど……」

「どうやらこっちから行かないことに疑問を抱いてるようだ。そりゃそうだ。こっちの方が近いからね。彼女は悪魔のロードということには気づいてない様子で「まあいいか」と言い無理やり納得させるような感じだった。」

「それじゃ、行こうか」

「僕は真横にあった階段から降りようとすると

『見つけたぞ！ 吉井だ！』

「ヤバイ！」

「僕は美樹さんの手を掴み、階段を駆け下りた。」

「わわ！ どうしたんですか、吉井先輩！」

『今の声、見滝原中学の美樹さやかの声だよな！』

『あのクソつたれはとうとう中学生まで手を出したか！』

『あのクズ野郎からさっさと解放させてこれからの人生は俺たちで育ててやるっ！』

「吉井先輩。逃げましょう。全力で」
「どうやら彼女の危険値センサーにも事の恐ろしさに気づいたようだ。」

僕の中で今までにないぐらいまでの危険値センサーが自分の中に鳴り響く。捕まったら、殺される。

『待てや吉井！ さやかちゃんから手を離せや！』

『さやかああああ！！ 君が俺が守ってあげるよおおおお！！』

「ひひひひひひ！！」

これまでにない恐怖を感じ、全力疾走で走った。体力？ んなもんあってもなくてもこんな危険な状況で構ってられっか！

「どうする……どうする僕！」

必死にFFF団から逃げるための作戦を考える。

ダメだ。どこをどう探しても死にか直結しない。

「こんなところで……死んでたまるかあ！」

今捕まったら、僕が死ぬだけではなく、美樹さんもFFF団の餌食になるだろう。ムツツリ商会がらみで。

『貴様らあああああ！！ 何をしているかあああああ！！』

と、FFF団の後ろから聞き慣れた野太い声を放つ鬼、鉄人が来た。

『『『！？』』』

皆の体が振るえ立ち止まり、皆同時に後ろを向いたら、ずっと向こうに鉄人が物凄い形相（まさに鬼神）で追ってきた。

『『『ひひひひひひ！！』』』

一斉に皆が走り出した。またあんな悪魔、いや、鬼神に捕まったら、次は死ぬ！ 絶対死ぬ！

とにかく僕は美樹さんの手を握り、これからの人生走れなくなる

んじゃないかってぐらい命がけて走った。

「貴様らああ！！ 今日という今日は許さんぞおお！！！」

僕ら（僕＋美樹さん＋FFF団）は鉄人との競争をチャイムが鳴るまでやっていた。

「もうダメ……」

僕は卓袱台に身体を任せて寝ている。正直、もう動きたくない。

「死ぬかと思つた……」

「だ、大丈夫だった？ さやかちゃん……？」

僕の席から少し斜め横にいる鹿目さんが僕と同じようにしている美樹さんを宥めようと頑張っている。

鹿目さんの声は思つた以上に癒されて、少し楽になる。

ついでに、僕以外にも全員この体制をしている。

こんなことになっていないのは、美波と秀吉と姫路さんと雄二と鹿目さんだけだ。

「つたく、どうしていつもこんなにへばってるのよ……」

美波が僕の前に来て呆れた声で言ってくる。

「仕方ないじゃないか…… FFF団の連中が勘違いして追ってくるから……」

「勘違いさせるようなことをしているのは明久君じゃないですか」

と、姫路さんが入ってきて、反論される。

「別にそんなことしてないけどな……」

「明久君には自覚がないだけです」

「そうよアキ。瑞希の言うとおりよ」

と二人に攻められる僕。もう二人相手に反論できる力は残ってない。

「別によいではないか。いつものことじゃろつて」

と秀吉も入ってきて僕のフォローを入れてくれる。

「まあ、そうだけども……ねえ、瑞希」

「え、あ、はい。そうですね……」

ん、どうしたんだろう。急に美波と姫路さんの歯切れが悪くなった。

（お主らの気持ちはわからんでもないが、少しは休ませておいた方がよい。本当にしんどい感じじゃからの）

（（で、でも！））

（昼休みが終わったら、試召戦争がある。そのためにも体力は戻しておいておきたい。これで良いかの？）

（（うう……））

小声で話してたから全然話は聞こえなかったけど、美波と姫路さんは自分の席に戻った。どうやら上手くまとめてくれたようだ。

「ありがとう。秀吉」

「別にかまわぬ。これも友人のためじゃ」

秀吉は本当に良いお嫁さんになるだろうな。

と、雄二がそろそろいいかと言うような顔で立ち上がり、教卓の前に行った。

「お前ら。体力が消耗しているところで悪いが、今日の昼休みが終わったら、試召戦争を行う。相手はDクラス。昼休みが終わるまでには体力は全快にしとけよ。相手はDクラスであることを忘れるな。作戦は開始直後に説明する」

と雄二はそれだけを言い、下がった。

ついでに、今は授業中だけど、自習時間になっていた。プリントが配られて、この時間の担当の先生はそそくさに教室を出た。昨日から殆ど担当の先生の授業を受けていない。何かトラブルでも起きたのだろうか。

と、雄二が僕のところに来て、僕の耳元で呟いた。

（明久。4限が終わったら、ババアのところに行くからお前もこい）

(え？ どうして?)

(お前もみてわかるだろう。この様子)

(まあ、確かにおかしいとは思っけど……)

(何かワケありみたいだからな。ババアに問い詰める)

(オーケー。わかったよ)

まあ、気になってたから、暇があったら話を聞きに行こうか悩んでたところでもあったしね。

雄二は僕から離れて、自分の席に戻った。何か今日は大変だなあ……。

魔女と走者と地獄の鉄拳（後書き）

皆さんGuten Morgen、Hallo、guten
Abend。（ドイツ語）

今回は走ってはわかりです。

雄二は何か気になっている様子だったけど……？

次回をお楽しみに！

バカテスト「数学」

$x(2 + 3y) - y(5 - 2x)$ を解きなさい。

鹿目まどかの答え

「 $2x - 5y + 5xy$ 」

教師のコメント

正解です。特に問題ありません。

美樹さやかへの答え

「 $2x + 5y - 5xy$ 」

教師のコメント

符号間違いですね。よくある間違いですが、見直しをして
おきましょう。

土屋康太の答え

「これを解けば世界が滅んでしまっ」

教師のコメント

では今ここにいる私は何なのですか。

吉井明久の答え

「この世には解けないものがいくつもある」

教師のコメント

カッコいい決め台詞だと思いますが、今がその時ではない
はずです。

バカテスト「数学」(後書き)

今回は数学です。

皆さん知っての通り、僕は成績は悪い方で、合っているとは思いますが、間違っていたら報告お願いします。

それでは、次回もお楽しみに！

学園長と脅迫状と学園の危機（前書き）

諸注意について。全略。

学園長と脅迫状と学園の危機

4時間目も無事終わり、雄二は教室からさっさと出て行く。さて。それじゃ、僕も行きますか。

立ち上がり、僕も教室から出て行くこととする。

「明久君。どこに行くんですか？」

姫路さんに止められて立ち止まる。事情は説明しない方が良さだろうからなあ……。

「雄二と少しね」

とりあえず、学園長に会いに行くことは言わない方がいいだろうから、誤魔化しておかないと。

だけど、姫路さんは恥ずかしそうに顔を真っ赤に染めた。はて？僕何か変なこと言ったかな？

「あ、あの……明久君！」

「あ、うん」

少し緊張が走る。どうしたんだろう。何か大切な話でも

「あ、明久君にはまだ早いと思いますっ！！」

「物凄い誤解が起きてるっ！！」

一体どうしてそうなったのだろうか。やっぱり姫路さん、Fクラスに毒されてきているのかな……？

と、一人心配しつつ誤解をどうやって解こうか悩んでいると、遠くから雄二の声が聞こえてきた。

『おい明久！ 早く行くぞ！』

そうだった。早く行かないと、昼休みが終わってしまふ。

「それじゃ、急ぐから」

と、今だ火照ってる姫路さんと別れ、雄二のもとに行った。

「邪魔するぞ」

「失礼しまーす」

学園長室のドアを開けて、僕と雄二は堂々と中に入る。

「お前らはとうとうノックも出来なくなったのかい……？」

要らぬ心配だ。

「おいババア。今回はどうした？」

雄二がいつもの口調で学園長に問う。

「どうしたって、何がだい？」

「とぼけるな。昨日からのことだ」

「と、いうと何さね？」

「前触れもなく昨日から教師どもは変わるわ、自習になるわばっかだったら、幾らなんでも不自然だと思っただろうが」

「ちゃんとわかってるみたいだね」

「一体何の用だ？」

話についていけない。二人は一体何を話しているんだろうか。

「Aクラスと戦えといったらどうさね？」

「何を隠している」

え？ Aクラスと戦う？ どうして学園長の口からそんな口が出るんだ？

「中学どもの勉強意識を高めてほしいのさ。この短い期間だからね。この学校のシステムを思う存分に使ってほしいという配慮さね。ただでさえ評判が落ちてるんだから、これぐらいしてもらわないとね」
嘘だ。学園長がそんな心づかいの利いた人物ではないはずだ。

「試召戦争は俺らの意思で決めるもんだろう？ それに負ける可能性の高いFクラスに、そんなことを学園の長であるあんたが進めるとは、どういうこった？」

「だから言ってるじゃないか。勉強の工場と、評判が落ちて」

「本当のことを言ったらどうだ？」

「……………」

学園長が思案顔になった。どうやら雄二に押されて、どうするか

考えているようだ。

「わかったさ。正直に話そうじゃないか」
「どうやら折れたようだ。」

「あまりこういうことを公表したくはないから言いたくはないんだ
けどねえ……」

「どうやら、トラブルであったいたようだ。」

「昨日の2時限ぐらいに脅迫状が届いたのさ」

「脅迫状？」

「今、自分が理解を得たのは脅迫状が送られてきたというだけだ。
けど、どうしてまた？」

「ババア長。まさかまた何かやらかしたんですか？」

「失礼なこと言っんじゃないよ。私は何もしていないさね」
「じゃあ、脅迫状なんか届いたんだ？」

「これがその内容さね」

「学園長が机の引き出しから一つの茶筒を取り出した。」

「えーと、何々……」

「雄二が茶筒を開けて、手紙の内容を見ている。」

「なるほど。なんともバカらしい内容だな」

「雄二から手紙を受け取り、脅迫状の内容を見た。」

《学園の悪評を流されてほしくなければ、試召戦争でFクラスを始
末せよ》

「確かに、見るだけでもバカらしい内容だった。」

「僕は茶筒と一緒に学園長に帰した。」

「確かにこんなバカげた茶番みたいなものに付き合ってる暇はない
んだけどね。お前らが学園の評判を悪くしたせいで、結構追い込ま
れてるところもある。これ以上醜聞が世間に知れ渡るようなことが
あれば、本当にこの学園は潰れるかもしれないのさ」

「うん。どういふことか全然わからない。」

「つまり、ババアは脅迫状が本当かどうかわからないので、脅迫状の指示に従うしかない。とりあえず、Fクラスを負けさせるには、Aクラスしかないと思った。それを告げるために俺たちを遠まわし……つまり、教師どもを動かして俺たちをここに来させるようにした。そういうことだな？」

と、雄二が僕にもわかり易いようにまとめてくれた。

「そういうことさね。できれば調べられる余裕があればいいんだけどね。でもそんな時間はない。つまり、あんたらはAクラスに負けてほしい」

と、学園長は教育者が言う言葉じゃないことを堂々と僕らに告げた。

なるほど。ようやくわかった。そういうことが。

「お断りします」

僕ははつきりと断った。そんな八百長みたいな真似してAクラスに負けたかない。

「明久の言うとおりだ。俺たちはAクラスに負けたくない。むしろ勝つ。絶対にな」

「言うと思ったさ。じゃあ何か当てはあるのかい？」

どうやら予想の範疇だったらしい。正直、こんな話を聞いたら茶化すことは出来ない。自分達のこの学園から転校したくはない。

「Aクラスの動きが気になる。もしかしたら今回の件に関する事情があるかもしれないからな。ムツツリーニ 土屋康太にこのことも兼ねて調査してもらおう」

「できればあまり他人に知れてほしくないんだけどねえ……」

「今はそういう場合じゃないでしょ？ ババア長」

「まあ、そうさね。この際警沢は言わない。あまり人目につかせるんじゃないよ」

「あいよ」

「りょーかい」

僕らは適当に返事を返して学園長室から出た。

それにしても、つくづくこの学園は危機に瀕してるなあ……。

学園長と脅迫状と学園の危機（後書き）

何か今回は真面目です。

次はいつも通りに戻す予定です。

次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1161y/>

バカと魔法少女と召喚獣

2011年11月16日05時26分発行